

# 文献センター通信

第 40 号  
2017年9月1日  
一部 100 円

## 大杉栄・伊藤野枝・橘宗一墓前祭

今年も名古屋、静岡で

今年2017年も毎年恒例となっている名古屋と静岡で大杉栄・伊藤野枝・橘宗一の墓前祭が予定されています。ぜひご参加ください。

### ●愛知県名古屋

「第43回 橘宗一少年墓前祭／講演会」

◇期日 9月10日(日)

◇墓前祭 13時 於 日泰寺境内

墓前

※自由ヶ丘バス停より西へ約300M。

墓前祭への参列は墓碑へ直行するか、

「日泰寺」境内入口付近の旧茶店跡へ集合してください。マイクロバスで12時

30分に出発／移動。

※「覚王山日泰寺」へはJR名古屋駅から地下鉄東山線「覚王山駅」下車、1番出口、徒歩5分

●静岡県静岡市

「二〇一七年 墓前祭・講演会」

◇期日 9月16日(土)

講演会 14時 講師 梅森直之氏  
(早稲田大学政経学院教授)「ロシア革命100年―大杉栄とその時代」(仮会場 名古屋 YWC Aホール 2階 ※愛知芸術文化センター 南向かい) (052-96117707) 地下鉄東山線「栄」下車、5番出口、東へ徒歩3分

参加費 5000円

連絡先 橘宗一少年の墓碑保存会 (052-84217641アルス内)

※墓碑保存会への維持会費ご協力をお願い(年一口3000円)

郵便振替口座 00870-1-120387

橘宗一少年墓碑保存会

●静岡県静岡市

「二〇一七年 墓前祭・講演会」

◇期日 9月16日(土)

講演会 14時 講師 飛矢崎雅也氏

「カンバスの大杉、内務省を走らす!? ―大杉栄の「実行の芸術」(あざれあ

第三研修室(静岡市駿河区馬淵1丁目17-1) / 静岡駅北口から西徒歩10分)

墓前祭終了後、会食。

11時 墓前祭(香谷霊園 / 静岡市葵区香谷二丁目174番地) \*ゲージグ

ル地図で「静岡市 大杉栄の墓」で検索。

墓前祭終了後、会食。

14時 記念講演会 飛矢崎雅也氏

「カンバスの大杉、内務省を走らす!? ―大杉栄の「実行の芸術」(あざれあ

### 主な内容

大杉栄・伊藤野枝・橘宗一墓前祭	1
大杉栄らの墓誌ができるまで	2
追跡・「新居格」文庫	3
新刊紹介(拡大版)	4
サークルA(東京)の例会報告	6
連載 脱原発・裁判の現場	7

## 〈予告〉文献センター 第4回総会、開催予定

アナキズム文献センターの第4回総会を本年末に開催します。

この総会は、当文献センターの運営を支えてくださっている会員、協力者の皆さんにこの間の活動の総合的な報告を行い、これからの活動方針を示すために開催されます。

定例総会の開催については、「アナキズム文献センター規約」に最低3年に1回と規定されており(第九条)、第1回が2008年12月に東京・新宿で、第2回が2011年6月に大阪、前回は2014年11月に神戸で開催したので、今回の第4回総会は約3年間の間を置いたこととなります。今回の開催地は東京。日時場所は未定ですが、決まり次第、会員にはご連絡します。当日は重要事項については議題を会員に諮ることとなりますが、今回の総会では大きな決定事項は現時点ではありませんので、この3年間の報告が中心になります。多くの方のご参加をお待ちしております。



# 静

岡に大杉栄の墓があると知ったのはいつ頃だろうか。学生時代（90年代前半）に墓前祭実行委員会が出した冊子を読んだかと思う。インターネットがまだない時代、その冊子に掲載された2枚の写真と「沓谷霊園」という名称だけを頼りに、静岡市まで墓を探しに行つて、お参りしたのが懐かしく思い出される。

# 当

文献センター書庫で資料探しをしてきたところ、「大杉栄らの墓誌建立委員会ニュース」（1976年）1号〜4号を見つける。思えば、このニュースを見るまで荒畑寒村による碑文が刻まれた墓誌（写真は前ページ、碑文は下段）がいつ誰の手によって建てられたのか知らなかった。というわけで、このニュースとともに墓誌建立の経緯を振り返ってみた。

# そ

もそもは、1973年の虐殺五〇年祭が荒畑寒村、近藤真柄、瀬戸内晴美（現寂聴）を迎えて静岡で開催され、その際に瀬戸内氏が「一緒に逆殺された伊藤野枝、橋宗一もここに埋葬されている事実を明示しておくべき」という提案がなされたのが発端だったようだ。ただこの時は実現に至

らなかった。

# そ

の後、名古屋市の日泰寺で橋宗一少年の墓碑が発見されたことから大きく動き始める。近藤真柄を中心とした保存運動が始まり、墓碑の移築を終えた75年に当地で墓前祭が営ま

## <コラム> 建立委員会ニュースで見る 大杉栄らの墓誌ができるまで

れる。その際、近藤から「大杉の墓に墓誌建設を」という希望が山梨の遠藤斌を通じて静岡に伝えられ、富士地区合同労組、富士在住のアナキストグループ、島田の大塚昇、遠藤らで会合が始まる。大杉家の意向も確認して、近藤、荒畑の協力も得、76年5月「大杉栄ら墓誌建立委員会」（代表・近藤真柄）が発足。募金は静岡県評や五〇年祭関係者、向井孝らの努力もあり、合計で一〇〇万円以上を集めたという。

# こ

こでふと疑問に思うのは、なぜ大杉の墓が静岡にあったのか。同ニュースによれば、大杉の父・東が退

役後に住んでいた清水市（現静岡市清水区）で亡くなりその遺骨は同市の鉄舟寺に納められた、大杉の妹菊が柴田家に嫁ぎ静岡市鷹匠に住んでいた、という縁のようだ。大杉死後、親族は同じ鉄舟寺に納める意向だったが、当地

の在郷軍人会の反対運動を背景に、寺が反対し断念。当時の新聞（静岡民友大正12年12月）では「檀徒でなく宗教否定の大杉の埋骨は断然拒絶する」という住職の談話があるから、相当な拒否にあつたのであろう。結局、静岡市の沓谷霊園に納められることになる。

# つ

いに、1976年9月16日、荒畑、瀬戸内、大杉・野枝の遺児である普沼幸子らを迎えて、除幕式が行われる。全国から多くの人が駆けつけ、マスコミの取材も多数あつたという。

### 【碑文】

（編集部 古屋）

大杉栄は明治十八年 軍人の家に生まる 陸軍幼年学校を放たれ外国語学校 仏語科に学び 日露開戦に際し非戦論に共鳴して社会主義者となる 資性剛毅 才華煥發 無政府主義の一派を拓いて政府の弾壓に屈せず 幾度か牢獄の苦を忍び 迫害の鉄火を践めり 大正

十一年 日本脱出 仏蘭西亡命 故国送還の波瀾を至 関東大震災に遭遇して妻の伊藤野枝 甥橋宗一と共に軍憲のために虐殺せられ 惜むべし雄志逸材むなく中道に潰ゆ

荒畑寒村撰

一九二三（大正十二）年九月十六日 虐殺された大杉栄（一八八五年一月十七日生 享年三十八歳） 妻伊藤野枝（一八九五年一月二十一日生 享年二十八歳） 甥橋宗一（一九一七年四月十二日生 享年六歳）の遺骨を翌年五月二十五日この地に収む

一九七六年九月十六日

大杉栄らの墓誌建立委員会



## 追跡・「新居格文庫」 当時の新聞から判明

本通信35号に新居格(にいいたる)文庫の存在を記し、その詳細についての情報提供を求めた。(下段に再録)

既に六〇年、半世紀以上も昔のことなのであまり期待できないと忘れかけていたところ、意外にも本通信編集長・古屋君より情報が寄せられた。彼いわく——1955年に学芸通信社から刊行された新居格著「区長日記」の復刻出版(小松隆二さん、大澤正道さんの書き下ろし文章を付して今秋刊行予定)の編集作業をしていて、新居の区長選挙など当時の新聞記事が知りたいと思いい、東京都立中央図書館のデータベースで調べたところ、読売新聞の記事を見つめました。杉並郷土史会会報はインターネットで同会が区政施行80周年を記念として2013年に新居格に関する講演会などを開催、その模様を会報に掲載していたことを知り、同会のご好意で送っていただいたものです——。

記事は二つ。読売新聞の1952年7月31日号と、杉並郷土史会会報の

2013年3月25日号。読売新聞の記事は「文人区長偲ぶ新居格文庫」「各方面から千五百冊——故人の蔵書加え区立図書館に」と題され、そのリードに文庫設立の経緯がまとめられている。

杉並区の「文人区長」として知られた故新居格氏の生前残した文化的功績をながく伝えより住みよい文化の町をつくろうという「新居格記念会」では昨年同氏死亡後から記念事業の一つとして「文庫」設置に着手

していたが、このほど同会員270名ほかからの書籍1500余冊がましまり鈴木信太郎氏らの油絵までそえて区立図書館へ搬入がはじまり、近々これに新居格氏自宅にある蔵書を加え待望の新居格文庫が生まれ出る。

以上で文庫が設立された事情はほぼ説明される。

次いで疑問となるのは、この文庫の現状である。杉並図書館に問合わせると、さすがは図書館

ですぐに新聞記事を確認してくれたものの、文庫そのものを知る館員がおらず、調べた上で連絡してくれる手筈となった。

さて、もう一つの記事は「新居格文庫」の見出しのもとに七行ほどの紹介。こちらは杉並郷土史会の会報であるのと、発行が四年前であるから、文庫の現在は郷土史会が把握しているように思われる。



### 〈再録〉本誌35号より ◎「新居格文庫」って

クロボトキンの『無政府主義の科学的基礎』という三八頁ほどのパンフレットがある。一九二六(大正十五)年八月刊行、編集・印刷・発行人は武良二で発行所は朔風会である。各所に伏字の空白の目立つ痛々しい版面であるが、あえてここに紹介するのはパンフそのものよりも、その表紙に捺された朱色のゴム印の故である。

そこには「故新居格蔵書」とあり「新居格文庫No.二〇二六」が大きな枠組みの中に収まっている。これは推測するまでもなく、一九五一年に同氏が亡くなった後に文庫が作られたこと、番号からみるとかなり大きな文庫になったかと思われる。

すでに六〇年ほどの歳月を経たので、その概要を知るのは難しいかも知れないが、どなたか情報をお持ちであれば教示ください。私たちが知らないでいる文献をめぐる活動のひとつである。

新刊紹介 〈拡大版〉

読書の秋ということもあり、今号ではこれまで誌面の都合で取り上げられなかった書籍も含めて、「拡大版」として紹介します。なお、紹介文は基本的には出版社の公式サイト等から引用しています。ご了承ください。

◎ 『暗い時代の人々』

森まゆみ著、亜紀書房、四六判296頁、定価1700円＋税

大正末から戦争に向かうあの「暗い時代」を、翔けるように生きた9つの生の軌跡を、評伝の名手が描き出す。

「満州事変勃発から太平洋戦争終結にいたるまでの、あの『暗い時代』。その時、人々は何を考えていたのか、どこが引き返せない岐路だったのだろうか。この本の中でわたしが書いたのは、最も精神の抑圧された、1930年から

45年の「暗い時代」に、「精神の自由」を掲げて戦った人々のことである」（本書まえがきより）

〈目次〉 斎藤隆夫 リベラルな保守主義者／山川菊栄 戦時中、鶉の卵を売って節は売らず／山本宣治 人生は短く、科学は長い／竹久夢二 アメリカで恐慌を、ベルリンでナチスの台頭を見た／九津見房子 戸惑いながら懸命に生きたミス・ソシアリスト／斎藤雷太郎と立野正一 「土曜日」の人々と京都の喫茶店フランソア／古在由重 ファシズムの嵐の中を航海した「唯物論研究」／西村伊作 終生のわがまま者にしてリベラン

◎ 『ダダイストの睡眠』

高橋新吉著、松田正貴編、共和国、四六変型判264頁、定価2600円＋税

「ダダは一切を抱擁する。何者もダダを恋する事は出来ない。」

現実と内面、正気と狂気のおわいを超えた、詩的言語の実践。『ダダイスト新吉の詩』（1923）によって一挙に『現代詩』を到来させた日本最初のダダイスト、高橋新吉。虚無思想と禅を基盤とし、時代と社会を超越した14編を収録。

シリーズ『境界の文学』第4弾。詩人の没後30年を経て刊行される、「狂気」をモチーフにした短篇集。芥川龍之介の「ぼんやりとした不安」から太宰治の「HUMAN LOST」にいたる空隙を埋める、1930年前後の精神の横溢をみる1冊。小説、詩、编者解説、略年譜をモニタージュした斬新な構成で、新たな評価を迫る。

◎ 『啞蟬坊伝 演歌と社会主義のはざまに』



「わたしの政治への関心は、ぜんぶ託児所からはじまった。」英国の地べたを肌感覚で知り、貧困問題や欧州の政治情勢へのユニークな鑑識眼をもつ書き手として注目を集めた著者が、保育の現場から格差と分断の情景をミクロス

藤城かおる著、えにし書房、A5版360頁、定価3000円＋税

民衆の声を聴け——！ 自主制作CD 『明治大正発禁演歌へ唄ってはいいけません』を発行した著者による評伝の決定版。

明治・大正・昭和をあくまで演歌師として生きた啞蟬坊の足跡に見え隠れする演歌史、社会史、民衆史を膨大な資料と丹念な調査で掬い上げる「社会党ラップ節」の時代背景から製作過程等の詳細な検証は、時代を超えて人々の心を打つ演歌の精髓に迫る渾身の論考。電車運賃値上げ反対運動、高島炭礦の惨状の詳細解説、年表、演歌索引など時代を伝える貴重な資料でもある。

◎ 『子どもたちの階級闘争 ブロークン・プリテンの無料託児所から』

ブレイディみかこ著、みすず書房、四六判296頁、定価2400円＋税

コピックに描き出す。

2008年に著者が保育士として飛び込んだのは、英国で「平均収入、失業率、疾病率が全国最悪の水準」と言われる地区にある無料の託児所。「底辺託児所」とあだ名されたそこは、貧しいけれど混沌としたエネルギーに溢れ、

社会のアナキーな底力を体現していた。この託児所に集まる子どもたちや大人たちの生が輝く瞬間、そして彼らの生活が陰鬱に軋む瞬間を、著者の目は鋭敏に捉える。ときにそれをカラリとしたユーモアで包み、ときに深く問いかける筆に心を揺さぶられる。

移民問題をはじめ、英国とEU圏が抱える重層的な課題が背景に浮かぶ。「政治は議論するものでも、思考するものでもない。それは生きることであり、暮らすことだ。」

英国移民で一児の母でもある保育士



ライターが放つ、渾身の一篇。

●『マコの宝物』

えきたゆきこ著、現代企画室、A5判244頁、定価1500円＋税  
誰の心の中にもきつとある、子ども時代の宝物。

1950年代のある山里「花の木の里」の物語。山あいの集落に暮らす小学生マコの日々は、「この気持ち、わかるなあ」と、思わず笑みがこぼれるような温かさに満ちています。

春の里に響く子どもたちの声。集落を歩けば、田んぼ仕事をする大人たちから「おかえり」と声がかかる。祖父母世代の「大先輩」とともに真剣に遊び、さまざまな人々と関わるなかで、子どもたちは自分を取り巻く「世界」を見し、大切なものを育んでいくのです。  
〈著者プロフィール〉



本名浴田由紀子。1950年山口県長門市生まれ。北里大学卒業。臨床検査技師となる。74年、東アジア反日武装戦線大地の牙に参加。75年、逮捕。

77年、日本赤軍のダツカ・ハイジャック闘争で超法規的に釈放されアラブへ。95年、ルーマニアで拘束され日本に強制送還、服役。2017年3月、20年の刑期を終え出所。

●『日本のテロ 爆弾の時代60S-70S』

栗原康監修、河出書房新社、A5判128頁、定価1000円＋税

日本で、世界で、政治・文学・芸術が刺激しあつた60～70年代。過激化した若者たちの行動は「テロ」として一面的に報道されましたが、果たしてそれだけが真実でしょうか？  
本書は、今では信じられないような行動を起こした若者たちの実像を、時



代状況や世界情勢にそってわかりやすく解説します。

彼らの行動や考え方は、同時代の人々にとつても「世界」を考えるための重要な問いかけでした。それは作家や芸術家にとつて作品を作る上では避けて通れない出来事だったことがなによりの証です。本書では、同時代の文学・音楽・美術を紹介しながら、芸術が何を表現しようとしていたのかについても考えます。

混沌を極める現代社会で、彼らの行動を知ることが「時代」と「世界」への向き合いかたを大きく変えることになるかもしれません。この時代をさらに知るためのブックガイドを併録。

【目次】はじめに／何故、若者たちはいまでは考えられない行動をしたのか？  
／世界を変えるとは、どういうことか？  
／武器を持って闘いに向かった若者たち／東アジア反日武装戦線とは何者なのか？  
／文学的想像力は何故、テロに惹かれるのか？  
／直接行動に触発された芸術家たち

\*  
同社から、桐山襲『バルチザン伝説』、松下竜一『狼煙を見よ』が同時刊行。

〈予告〉シン・ポジウム  
「ロシア革命一〇〇年」  
11・12月開催予定

今年ロシア革命から一〇〇年の節目となるのを期して東京でシンポジウムの企画が進行している。

すでに今年に入って3月4日に初期社会主義研究会が主催した「アナキズムから見たロシア革命」(本誌第38号参照)がある。それに続く企画であり、詳細はまだ詰め段階であるが、その概要は、

- テーマ・詳細未定
- 日時・11月25日(日)もしくは12月2日(日)のいずれか
- 場所・東京古書会館(千代田区)を予定

〈予告〉コスモス忌  
本年は10月開催

毎年、多彩なゲストを呼んで開催されている秋山清さんを偲ぶコスモス忌が下記の概要で開催されます。

〈第29回 コスモス忌〉

● 日時：10月21日(土) 13時～17時

● 場所：築地本願寺 本堂内講堂

● 第一部：「私が出会ったアナキストたち(仮)」13時～14時半(話し手・林聖子、聞き手・森まゆみ)

● 第二部：懇親会 15時～17時

連絡先・同世話人会：携帯メール [shiryamabuki@ezweb.jp](mailto:shiryamabuki@ezweb.jp)

Circle A (東京)  
の例会報告

● 第2土曜日に変更

Circle A (サークルエー)の『アナキズム』誌編集委員会メンバーが中心となって今年の3月から開催されてきた月例会が、第3土曜日(から第2土曜日)に変更となりました。

場所はIRA (新宿三月工房)で4時～7時くらい(その後は飲み会となる)。自由参加・会費なし。

問合せ先は

[anarchism.ed@gmail.com](mailto:anarchism.ed@gmail.com)

(『アナキズム』誌編集委員会)。

\*

Circle Aを少し紹介しておく

と、アナキズムをめぐるこれまであれこれやってきた人たち十名足らずが、メンバーの結束維持と少しは何かアピールしていこうと相談して、一昨年の秋に何となく集まりを持つことになったのが発端。昨年のスペイン八〇周年記念集会やべ反委五〇周年シンポジウムの実行委の中心メンバーになっている。

今年の3月からは、メンバー交代で

テーマを持ち寄って報告する形をとり、月例の集まりをもっている。持ち寄り

で担当者が自由にテーマを選定して自ら発表するもよし、ゲストを招くのも

OKとして運営。

\*

● 取り上げられたテーマ

これまでにどんなテーマが取り上げられたかを記すと、以下の通り(括弧内は担当者名)。

・四月『アナキズム』誌の歩み(高橋)

現在19号(2015年刊)で小休止中の同誌の2001年以降の歩みを、特集

テーマと主要内容、社会的出来事などを

一覧表にまとめたレジュメで報告。19号ま

では毎年一冊から二冊、2006年には

単行本『アナキズム読本』、2014年にはアナキズム叢書として『労働

絶論』『アナキズムの展望』『死の商人への挑戦』の三冊の小冊子を刊行といった具合で、ちょっとした歴史である。ちなみに20号は現在編集中である。

・4月「鈴木清順とアナキズム」(皆川)

1970年前後の時代状況にあつて最も喚起されることの多かつたひとつに鈴木清順の存在があつたと振り返る

報告者が清順作品の魅力や蓮實重彦の

清順論への異議を展開。

・5月「モンドラゴン訪問記」(工藤)

昨年の夏にスペインのモンドラゴン

を訪問した折の見聞報告。モンドラゴン

の成立とどのような経営原則に立っ

ているかをパンフレットをもとに解説。

かつグローバルな経営展開が現在直

面しているモンドラゴンに突きつけてい

る課題にも触れる。近々仕事をかわ

ることになるかも知れない報告者は、「こ

んなのがあれば入るのだが…」とつづ

やく。

・6月「文献センターの現状と課題」(奥

沢)

・7月「チョムスキーのローザ・ルクセ

ンブルグ論」(三田地)

・8月「ロシア革命百年の相談」

・9月「予定」大杉の死(白仁)

## 連載 (12) 脱原発・裁判の現場 II

## 即決力が武器 仮処分

## 大阪地裁・ミサイル問題で

## 原発停止 審理中

武智 忍

北朝鮮の独裁者がメディアをにぎわせている。

同じレベルの道化者・トランプも先制攻撃は辞さない、という構え。

彼なら、やりかねない。

日本はどうか。北の度重なるミサイル発射に応じて「ミサイル破壊命令」が下されており、すでに小学生の避難訓練も始まっている。

準・「戦時体制」なのだ。

外交アナリスト孫崎亨氏によれば北朝鮮のミサイルに迎撃弾を発射しても、スピードの差で当たらない、そうである。

安倍政権が続いて、きなくさい風が吹いてきた。

さて、ミサイルなど、強力な破壊力をもつ武器で原発が攻撃を受ければどうなるのか？

原発を一年間運転すれば、放射性物質の蓄積量は広島原爆による量の千倍

に相当する——小出裕章。

それを承知している北朝鮮は、二〇一三年四月十日号の「労働新聞」紙上「原子力関連施設が攻撃を受ければ、日本は一九四〇年代に被った核の惨禍と比べものにならない途方もない災難を被る」だろう。と不気味に「予告」してもいるのだ。

東京新聞 二〇一七年五月三日「北ミサイルで地下鉄運転ストップしたけれど：原発なぜとめない？」

原発訴訟の現場はどうか。

アジアの、日本の、この異常事態を直視して、勝訴イコール、原発、即停止の仮処分訴訟も先鋭化してきた。

— 安倍政権が北朝鮮ミサイルの撃墜命令を発している期間中は、稼働中の原発、高浜3、4号機は停止せよ。

今、大阪地裁・民事部ではこの審理が続いているのだ。

九月十一日に第2回審尋があるが、しばらくは、ここに至るまでの仮処分裁判を整理してみよう。

\*

二〇一五年四月。

福井地裁・樋口裁判長は、住民側勝訴の画期的な判決、「高浜3、4号機運転差止め」の決定を下した。

約八か月、原発は止まった。が、最

高裁・事務総局から派遣された三人セツトの裁判官(裁判長・林潤)は、関電、経産省の言い分を丸ごと呑み込み、抗告審でこれを棄却。

二〇一六年三月。大阪地裁・山本裁判長は住民の主張を認め、再び原発停止の仮処分決定。

稼働中の原発を止めたこの決定は、歴史に残る司法の英断、とたたえられ、欧米紙にも大きく報道された。

約一年後、これを破棄することになった大阪高裁の内部事情に深く踏み込んでみよう。

高裁の控訴審。三人の判事による合議制で判断が下されるが、杉江、吉川両判事には、すでに住民の訴訟を却下している「前歴」があった。問題は神戸地裁から転任してきた山下郁夫裁判長である。

住民側の観測では、彼は定年も近いから、裁判官の良心に従ったまともな審理↓判決を下すのではないか。

ところが、この「良心」は、山下氏の実利計算であつさりうち棄てられた。

今年の一月。「山下裁判長は次期・大阪高裁長官に内定」の情報が流れた瞬間、判事の実情に詳しい人々は、ガッ

クリため息をついた。

三月二十八日、大阪高裁の決定はため息どおり！

しかし、である。即決力を持つ仮処分にこだわる歴戦のつわものは、「次の一手」を打っていた。

三月末に大阪高裁のダメ決定が出るだろう。ならば、時を移さず、四月の阿タマに京都地裁へ三度目の正直、ならぬ仮処分を申し立てようではないか。

これは、騒る関電、安倍政権への大きな反撃弾になるだろう。

しかし……。京都地裁で仮処分を——の反撃弾は、実現の直前になって、京都弁護士団を牛耳る共産党系の弁護士によって潰された。

敵は、安倍政権に管理されている司法当局だけではなくたのだ！



〈写説〉二〇一五年四月、仮処分の即効力を見つけた福井地裁の勝訴

## 〈報告〉没後91年 文子 忌が7月23日に開催

やまなし金子文子研究会が主催する文子忌が七月二三日に山梨市で例年通りにとり行われた。強い日差しのもとでの開催となるのが恒例であったが、今年は珍しく小雨模様のもと、それでも四〇人を越える参加者を得て実施された。

文子の生家(牧丘町)での献花式の後、山梨市民会館に場所を移しての研究会では、山泉進氏が「文子の時代の裁判について」をテーマに講演。刑法七三条の大逆罪によって起訴された文子と朴烈がどのような裁判を受けたのかを、当時の法律と裁判制度を詳述しつつ興味深く説き明かした。

## 朴烈と文子を描いた韓国 映画「朴烈」(原題)

朴烈と金子文子の実話を元に映画化したイ・ジュンイク監督の『朴烈』(原題)が韓国国内でヒットしている。

二人の出会いから別れまで二人の愛を描いた異色作。文子を演じているの



は韓国の役者だが、当時の日本の内閣は日本の劇団「新宿梁山泊」が、朝鮮人を弁護した布施辰治も日本人の役者が演じているという。

イ監督は『アナキスト』(2000年)のプロデューサーでもあり、同作の制作中に朴烈を知り、その人物と思想に魅了されたとのこと。もちろん？日本では公開未定。

## 文献センターだより

○6月某日 新宿事務所にてセンター通信の発送作業。奥沢さんがこの日、瀧子さんの退院に立ち会うため富士宮へ。そのため、最小人数にて発送作業。

\*おかげさまで瀧子さんは退院。龍さんは夫婦二人での生活に戻りました。

○7月某日 奥沢さん、増山さんが来宮。この日は2人とも泊り込みで座木の剪定やゴミ捨てなどの作業を敢行。

毎月の「重労働」に頭が下がる。私は買ひ物の手伝いなど。

○7月某日 龍さん宅の電話機器の交換の相談あり、後日の訪問を約す。

○8月某日 9月発行号は大杉栄らの墓前祭を告知するため、いつもの月末ではなく月初の発行になるため締め切りが早くなる。それゆえ、早めに以前からお願ひした人に原稿の状況確認すると、止むを得ない諸事情があり原稿が書けないと返信あり。今号は珍しく原稿が少なめだったこともあり、さどうするかとしばし悩む。

○8月某日 デザイン担当N氏とカレンダーの話。来年版はすでにテーマは決まっているので(ネストル・マフノ生誕130年。昨年年のローザンヌ訪問で資料を探しておいた)、テキストをどうするかなど。

○8月某日 電話機器の交換のため、龍さん宅を訪問。すると、電気が止まっていた。聞けば、支払いが遅くなり止められたため、昨日払ったが再開しないので一晩ろうそくで過ごしたと言う。調べると、東京電力は連絡しないと再開しないらしい。意味がわからない。老夫婦にムチ打つ東京電力。急いで電

話をして再開させる。電気が通じないとできなかった電話機器の交換作業を無事に済ませる。

合わせて、通信に掲載したいと思っていた『戦後版平民新聞』を探しに書庫へいくも、見当たらない。奥沢さんに電話連絡したところ、アナキズム人名事典の編集作業のため持ち出ししているとのこと。では代わりに資料をを探している、「大杉栄らの墓誌建立委員会ニュース」なるものを発見。墓誌の経過などをはじめて知る。考えてみれば、墓がなぜ静岡にあるのかや墓誌の経緯も知らなかったため、墓前祭を告知する号に掲載する記事として良いのではないかと思いつく(2ページ参照)。

## アナキズム文献センター通信第40号

発行/2017年9月1日

発行所/アナキズム文献センター

編集/運営委員会

連絡先/〒160-0022 東京

都新宿区新宿1-30-12 302

郵便振替口座/

00850-3-30010

口座名 A文献センター

Eメール/contact@cira-japana.net

定価/一部100円